
愛しい君にもう一度

西宮 湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しい君にもう一度

【Nコード】

N6323C

【作者名】

西宮 湊

【あらすじ】

どこにでもいる、高校一年生の女の子。そんな彼女の唯一の趣味。それはゲームをすること。深夜まで起きて睡眠時間は四時間。そんな生活を送っていたある日、突然奇妙な現象に合い――……！？非日常的なあり得ないラブストーリーー！

第一話：私の日常（前書き）

この物語りには、「乙女ゲーム」と言う言葉を中心に進んでいくラ
ブストーリーです。

「乙女ゲーム」を知らない方。

また嫌悪感を抱かれる方は、読まないようにして下さい。

ちなみに恋愛対象者がゲームのキャラクターと言う設定にしてい
くつもりです。

第一話：私の日常

花ばなが鮮やかに彩る春の季節。

学校の体育館裏に、突然一人の男性が現れた。

薄く淡い桜色の花びらに囲まれて……。

『君は……誰？』

吸い込まれそうぐらい綺麗な瞳を私に向け、話しかけてきた。

“ど、どうしよう……。 ”

——……

「勿論、話しかけるでしょ！」

テレビの画像を食いいるように見つめていた“私”は、その画面に向かつて喋った。そして、手に持っていたコントローラーの決定ボタンを押した。

ピッ

押すと同時に機械音が鳴り、テレビの画像は次の場面へと移る――

……

『私の名前は――』

ブチン

「え……」

テレビの中の“私”が名前を言おうとしたその時。

突然画面が真っ暗になり、その言葉を最後まで言わずに終わってしまった。

「何で!?!」

何で急に電源が切れる訳!?

ガタガタと音を起てながらテレビを揺すっても、反応が無い。

不思議に思い、今まで使っていたゲーム機に目を向けようとしたそ

の時――

パシッ

「いつ……！っう――」

「いつまでゲームをやってるの！この子は！」

頭に激しい痛みと怒る母親の声が、上から降ってきた。

「お、お母さん……？」

気持ちが良いぐらいの音で頭を叩かれた私は、その部分を手の平で押さえ、少し涙目になってしまった。

「今何時だと思ってるの！？電気代が勿体無いでしょ！」

何だ。

明日学校があるから早く寝なさいとか、そういう事じゃないのね……。

「聞いてるの!？」

「ごめんなさい……」

自分の心配よりも、家計の心配をされてしまった事に少し不満を抱きながらも謝る私。

こんな自分を、正直偉いと思う。

まあ自分で言っちゃったら終わりだけど。

「わかったなら早くゲームを片付けなさい!」

「はい」

これ以上お母さんを怒らせてはいけないと、私は素直に従ってゲーム機を片付けた。

そんな様子に満足したのか。

お母さんはやっと入って来たと思われるドアから出ていった。

「……」

あーあー。

折角やり始めたばかりだったのになー。

新作ソフト……。

仕方ない。

また明日にでもするか。

電気の明かりを消して暗くなった部屋の中。

敷いてあった布団に潜り込み、そんな事を考えていた。

――……

「おはよー」

「あ！おはよう雛ちゃん！」

朝から寝不足のせいで気だるい声を出す私。

そんな私とは逆に、小学生時代からの親友、綾^{あや}さんは笑顔で挨拶してくれた。

「その顔は昨日の晩、また夜遅くまでゲームしてたんでしょ」

「さすが綾さん、鋭い」

「いやいや、雛ちゃんがわかりやすすぎるんだよ」

真剣に誉めたつもりだったのに、そんな言葉も笑顔で軽くかわされてしまった。

冗談抜きに、鋭いと思うんだけどなあー。

「それで、昨日はどこまで進んだの？」

「ふっ……」。

そりゃもう、三周目に突入しました」

三本の指を立て、綾さんの顔の前に突きだし、少し怪しげな笑みをしつつ答えた。

「昨日だけでもう三周!？」

「うん。好きだからね」

「それでも凄いよ!」

本当に驚いているのか、目を見開いて見つめる綾さん。

そんな様子に私はつつい嬉しくなってしまう。

やっぱり得意な事を誉められるのは嬉しい。

しかも優等生と言う言葉が似合う綾さんに言われるのだから、尚更だ。

つまらない事かもしれないけど、自分が少し、誇らしげになる。

キンコンカンコン……

「ん？」

そんな事を思っていると、教室にチャイムの音が流れた。

一時間目の授業が開始した証拠だ。

「それじゃあまた後でね！」

「うん、また後で」

チャームがなつてしまい席に戻っていった綾さんを、私は小さく手を振り見送った。

教室内のざわめきも、少し静かになる。

中には教科書を出して、授業の準備をしている子もいた。

「私もそろそろ準備をするか」

眠い頭を何とか叩き起こし、一人呟きながら鞆の中をあさり始める私。

そして必要な分だけ机の上に置き、一息ついた。

「今日は誰と会おうかなー」

私の名前は桜井さくらい 雛ひな。

可愛い名前は裏腹に、いたって普通な高校一年生だ。

テストの点は良くて六十点代後半。

運動神経は中学生時代、五段階評価の通知表に三が付く程のもの。

容姿だって不細工という訳じゃないけど、綺麗とか、可愛いという訳でも無い。

人によって基準が違っただろうけど、少なくともモテる人種で無い事は確かだ。

今の今まで、この十五年間。

男の

「お」の字でさえ気配が無かったのだから。

まあ容姿以外にも、理由はあるけどね。

……

「ただいまー」

って言っても、
「お帰り」

だなんて言ってくれる人はいない。

私の両親は共働き。

だから帰って来る時間は、二人共夜遅く。

下手をすれば深夜になる事だつてある。

私には嬉しい限りだけど。

「……さて、と」

部屋にあるベッドの上に鞆を放り投げ、素早く制服を脱ぎ捨てると、寝間着に着替えた。

「ふっふっふっ」

そして暗い部屋の中、怪しい笑みを浮かべる——……何てことはせず、ゲーム機を取り出してテレビの前に座った。

勿論部屋の電気はキッチンと付けて。

「今日は目指せ！佐々木先輩のハッピーエンディング攻略！」

電源を入れたテレビ画面の前で、握り締めたゲーム機のコントローラーを手にし。

私の名前は桜井 雛。

いたって普通の高校一年生。

どこにでもいる十五歳の女の子。

そんな私の趣味は……

「乙女ゲームの完全制覇！」

なのです。

第二話：まだ見ぬ扉

「ふ、ふああー……」

「凄いあくびだね雛ちゃん」

「昨日も調子に乗って、夜中までやってたからねー……」

学校のお昼休み。

ご飯を食べ終った私は、午後からの授業を受ける為、綾^{あや}さんと教室でくつろいでいた。

「午後からの授業とか、大丈夫？」

「うん……何とか……」

本当は凄く眠いけど……。

瞼^{まぶた}は重くてなかなか開かないし、心配そうに声をかけてくれる綾さんの顔が少しぼやけて見える。

んー……これはやばいかも。

いくら明日は学校が休みとは言え、後何十分も正直耐えられるかどうか……。

「あつ！先生が来た！
それじゃあ私、席に戻るね！」

「あ、本当だ」

いつの間に……。

教室の黒板の前には既に先生が立っていて、教室内がざわつく。

いつもの事なのに、今日は少しざわめきの声が大きい。

「……？」

あれ？

あの先生って確か――

「はいはい！皆さん静かにっ！」

何で里中先生が……？
さとなか

里中先生は私のクラス、一年一組の担任だ。

見た目は恐い印象を受ける女の人で、結構厳しいと噂される先生の内の一人だったりする。

受け持つ教科は現代国語。

噂とは裏腹に分かりやすい授業をしてくれるので、私が好きな先生の一人だ。

でも何で里中先生が？

今日の午後からある授業は私の大っ嫌いな英語？。

受けたくは無いけど仕方ない。

でも気が重いし眠いなーだなんて思っていたりしていた。

なのに何で？

時間割が変わったとか？

「ねえー、次の授業って確か英語じゃなかった？」

「だよねー」。

何で里中先生がいるんだろー」

どうやら他の皆も私と同じような疑問を抱いているらしく、小声で話している。

「えー午後からの授業だった英語？ですが、学校の都合により、無くなる事になりました」

「え……」

無くなった？

「今日は午後から先生達で会議が行われる事になりましたので、授業はありません」

里中先生がそう言つや否や、よりいっそうざわつく教室内。

つまりーそれってー……

「ですので皆さん。

今日はいつもよりも少し帰るのが速いですが、すみやかに下校するように。

いいですね？」

家に帰れるって事……？

まだはつきりしない頭を必死に使い、そんなことを考えていると、先生は教室から出ていった。

「……」

「ひーなちゃん！」

「あ、綾さん」

「もう帰っていいだなんて、凄くラッキーだね！」

「うん」

本当に、珍しい事もあるんだなー。

学校が午前授業で終わるだなんて。

まあ眠たかったら助かったけど……。

「……」

……ん？

待てよ。

と言うことは今日はいつもよりも時間があるって事だよね？

しかも明日は休み……。

「……？雛ちゃん？」

突然黙りこんでしまった私の態度を不信に思ったのか、綾さんは顔を覗き込んだ。

多分さっきまで眠そうにしていた私の目が、いきなり見開いてはつらつとしていたからだろう。

でも今の私に、そんな事をいちいち気にしている余裕は……無い！

「綾さん！」

確か今日綾さんは掃除があつたよねっ！」

「う、うん」

「ごめん！」

今日先に帰ってても良い！？」

「別に大丈夫だけど……」

綾さんの返事を聞くや否や私は、素早く机の中の教科書やらを鞆に詰め込む。

そして、一秒も無駄な時間は許されないと立ち上がった。

「はっ、速い……」

「ありがとう綾さん！

本当にごめんね！

それじゃあまた月曜日につ！」

「う、うん。

じゃあねー……って、ちょっと……雛ちゃん！？」

帰る準備が出来ると同時に、私は早々と鞆を背負って教室を出ていった。

速く……速く家に帰らないと、時間が……っ！

これからの事を考えると自然に足が速く歩いてしまう。

気が付くと、私はいつの間にか走り出していた。

綾さん！

本当にごめんっ！

この穴埋めはいつか必ずするからっ、今日だけは……今日だけは……っ！

折角早く終わった学校。

この時間を無駄にする訳には行かない！

いつもよりも長い間出来る！

そう。

私が早く帰りたい理由だなんて、ただひとつ！

「げっ……ゲームウーっ！」

乙女ゲームのオールクリアー！

完全制覇だアー！

この時まだ私は、気付きもしなかった。

このゲームをしようとしていた事が。

ゲームを完全制覇しようとしたこの行動が、あんな事を引き起こす
だなんて……夢にも思っていなかった。

これから起こる、その非日常的な現象を。

不思議な世界の扉を、
既に開いていた事に――
……。

第三話：始まりは突然に

……

『君は……誰？』

『……』

……何で……。

どうしてこんな事に……？

突然の事に驚き、頭の思考回路は故障中。

何が起こったのかまったく理解出来ない私の目の前に、ある一人の男性が立っていた。

『ねえ……聞いてる？』

『……』

あり得ないでしょ。

こんな事。

おかしい。

どう考えてもおかしすぎる。

こんな状況……あり得る訳が無い。

こんな……こんな事って——……

今から遡^{さかのぼ}ること、約一時間前。

この時の私は、まだ普通だった。

ただ何も考える事無く——……いや、失礼。

ただひたすら、ゲームの事で頭が一杯だった。

何せ大好きな私の趣味。

乙女ゲームを堪能する事が出来たのだから……。

……

「今日はもう最高っ！」

いつもなら家に帰って来て、すぐにゲームをし始めても何時間ぐらいしか出来なかった。

口煩いお母さんのお陰で。

なのに今日は学校が早く終わった。

しかも明日は休み！

時間がいつもよりたっぷりあるっ！

本当、何て幸せな一日なんだっ！

「……よしっ！」

時間はたっぷりある。

つまり、いつもは難しくて時間が無かったハッピーエンディングを、やっと思えるっ！

正確にはクリアー出来る可能性が増えたって事だけど……。

でももう、プレイ中にお母さんに電源を切られる事は無い！

ああー！

幸せ過ぎて顔がにやけちゃうよっ！

「ふっふっふっ。

今日こそ……」

今日こそは落としてみせるんだからね久藤^{くどう}君っ！

覚悟して待ってるよー！

いつも以上に気合いを入れまくった私は、早速テレビの前に座り、ゲーム機の電源を入れた。

勿論コントローラーを握りしめて。

「さてと、再生再生っ……と」

バチバチッ

「え？」

バチバチバチッ

ゲーム機の電源を入れたその時。

どこからか、静電気が起きたような音が聴こえてきた。

……？

え……何？

このバチバチッとかいう音。

まるで電気が溜りすぎて外に飛び出てるような――

ブチン

「……」

そして変な音がした数秒後。

ブチンという音と共にテレビの画面は真っ暗になり、ゲーム機の電源は切れてしまった。

今の今までついていた、電源のランプの光が消えている……。

「はぁーあ!？」

何ですかこれは!？

意味がわからん!

何で切れるの!？

いじめ!？

これっっていじめっ!？

「もしもし、ゲーム機さん」

画面、映るでしょ？

ちゃんと映るよね。

映してくれるよねえ!？

「ゲームウーっ!

お願いだから起動してえーっ!」

こんな日に故障とか絶対嫌だし！

私の幸せな時間がアーっ！

ブーン

「…………え？」

暗かった画面に突然光がついた。

明るくなり、色までついて、文字が映し出される。

“ 只今ロード中………… ”

よくよく見ると、電源のランプもいつの間にかついていて、中のソフトが動く音まで聴こえる。

「やった…………」

やったよ私！

ゲームが動き始めたじゃんっ！

私の必死の祈りが通じたんだなきつと！

神様ー！

ありがとうございますっ！

よっしゃあー！

これでやっと久藤君に会えるっ……。

嬉しくなりながらも、再びコントローラーのスタートボタンや決定ボタンを押し、私は画面を変えてまた動かし始めた。

「まずは名前名前……」

テレビには文字が映し出される。

もう何十回と見た事のある画面。

“貴方の苗字は？”

「さーくーらーいつ……と」

“貴方の名前は？”

「ひーなっ……と。
よし、これでオッケイ」

“貴方の運命の相手は？”

「勿論、久藤 祐希君！……ってあれ？」

変だな？

こんな選択あつたけ？

確かストーリーを進めていくうちに相手役が決まるようになってたはずじゃー……。

“貴方の苗字は『桜井』。
貴方の名前は『雛』。

貴方の運命の相手は『久藤祐希』。
以上でよろしいでしょうか”

まっ、いつか。

もしかしたら何回もクリアする事によって出来るようになる新機能かもしれないし。

「オツケイですっ……と」

ポチ

うん。

これでもう大丈夫――

バチバチッ

「えっ？

また故障!？」

やっとゲームが始められると思った次の瞬間、またバチバチと電気が弾けるような音がして、テレビの画像がおかしくなった。

「ちよっ……ゲーム機さん!？」

もしかしてやり過ぎて故障したのか!？

そりゃー一日十時間ぐらいしてたけど、まさかそんなっ……。

バチバチバチッ

やばいつ！

どっどん電気の音が大きくなってるっ！

「——……っ！？」

一瞬。

まばゆいばかりに物凄い光を放つ画面が、テレビだけでは無く私を包み、部屋全体を照らした。

辺りは何も見えなくなり、真っ白な光だけが私の視界に映る。

「まっ……眩しいっ……！」

その光の眩しさに耐えきれず、目を瞑った次の瞬間——

「——“君は……誰？”」

「え……？」

低く、聴いたことのある男性の声がした。

そして光が消え、景色をまともに見られるようになった私の前に、
一人の男性が立っていた。

見たことのある恰好。

見たことのある顔。

見たことのある、聴いたことのあるその言葉。

それは私の、嫌というほどよく知っている人物。

「ねえ……聞いてる？」

「……」

紛れもなく、今から会おうとしていた、“クリアーしようとしていた”——……

「久藤君っ！？」

ゲームのキャラクターその人だった。

.

第四話：彼の名前

いつからだろう。

私がこんなにもゲームを、“乙女ゲーム”と呼ばれるものを好きになったのは。

毎日毎日。

何時間も、……何時間も。

いくらやっても飽きないぐらい、熱中してしまうようになったのは。

いつだったのか、今はもう思い出せないぐらいに、遠い遠い記憶。

唯一覚えていることは、初めて乙女ゲームをした時の気持ち。

恥ずかしくて。

いけない事をしているような、そんな気持ち。

なのにどうしてなのか、ときどきして、幸せだと思っ自分がある。

そんな気持ちを味わいたくて、またしてしまう私がある。

多分それが……乙女ゲームにはまってしまった、私の原因。

でもこの時は、考えもしなかった。

だってそうでしょ？

幸せな気持ちになれるけど……。

どきどきした気持ちになるけど、……それはあくまでもゲームの話。

現実にはあり得ない。

こんなことあり得ない。

そう思ってた。

今のこの状況に……なるまでは……。

ねえ？

……

「ねえ……聞いてる？」

「……」

さて私。

ちょっと頭の中を整理してみよう。

まずはここはどこなのか……。

ここは私の部屋だ。

『勉強をする為に』とお母さんが高校の入学祝い用意してくれた、私のお城。

まあ実際のところ、『ゲームをする為に』用意された事になったけど。

高校生活を送る為に、最低必要限の物しか置いていないシンプルな部屋。

中でもテレビなんて私のお気に入りだ。

画像が綺麗に映って、家の中にあるテレビでは一番大きい。

お母さんに必死に頼んで、つい最近やっと手に入れたばかりのテレビだ。

そしてテレビの前には最新のゲーム機。

家庭用のそのゲーム機は、私の宝物だ。

中学生の頃バイトをして自分で買った大切な物。

なのに今。

その大切な、大事にしていたゲーム機が火花を散らして壊れている。

バチバチと、オマケに煙けむりなんて出ている。

完璧に壊れてるよね。

これ……。

「……」

「ふうー……。」

君って耳が悪いの？」

「……」

壊れてしまい、無惨な姿になった宝物の横にいた人物。

私と同じぐらいの歳の男性。

この場合青年と言った方が正しいんだろうけど。

髪はさらさらして爽やかな印象を受ける薄い茶色。

目はくつきりとした二重で、茶色に近い赤色をした瞳。

身長は私なんかよりずっと高く、百八十センチぐらい。

なのに見下ろされている感じは全然無くて、優しい印象を受ける。

そんな青年が溜め息を一つつき、さっきから私に話しかけてくる。

幻聴だ……これは幻聴なんだ……。

聞こえない。

声なんて絶対聞こえない。

「もしもし」

見えない……絶対見えてなんかないっ。

青年の顔が……私の顔に近付いてるだなんてそんな幻覚——……

「——って、ええっ!？」

「やっと反応してくれたよ。」

耳だけじゃ無くて目まで悪いのかと」

お互いの唇が触れ合うまであと数センチ！

と言うところで、近付いてくる気配に気が付く事が出来た私は、何とかその距離を離すことに成功した。

「なっ……、なっ……！」

「何？」

顔がどんどん赤くなる私とは違い、青年はあり得ないぐらいとても冷静だ。

……近っ！

顔がっ……顔が目の前につ……！

「ん？

ああ、もしかして男と話した事が無い、とか？」

「ちっ……違っ……！」

「フッ。

なら何で普通に喋れないの？」

そんなに顔を赤らめてさっ。

そう言うと、青年はまた私に近付いて来た。

「ちっ……近寄らないで！」

「……？」

「貴方は……貴方は誰？」

普通に考えたらあり得ないこのおかしい状況。

今日だけで何回あり得ないと言う言葉を使ったか。

現実にかかるはずの無いこの事態に、私は頭が混乱していた。

見たことのある青年。

知っている人物にあまりにも似すぎている青年。

でもキャラクターだよ？

ゲームの中だけに存在するキャラクター。

あるはずがないでしょ？

こんな事。

「僕？

僕の名前は“久藤 祐希”。

君なら知ってるでしょ？

僕が誰なのか、だなんて」

これは夢？

私がゲームばかりしていたから、いつの間にか眠っちゃって、それでこんな夢を見てるのか？

だとしたらかなり妄想癖のある危ない子だね、私。

神様……。

ゲーム機の中に宿る神様……。

どうか夢ならば。

この夢から覚まして下さい。

そして私を現実の世界に戻して下さい。

だってこんな事。

こんな想いをしたくないんだもの……。

「げ……ゲーム機……」

私のゲーム機いっ！

・

第五話：彼の存在

「……っ」

痛い……痛すぎるっ……。

私の目の前に、壊れたゲーム機が一つある。

それが現実だと信じたくなって、私は頬をつねった。

でもやっぱりひりひりと痛くて、夢じゃないと思い知らされた。

「……くうっ」

ゲーム機……私の大切なゲーム機……。

お前は どうして壊れちゃったの……？

「ゲーム機いー……」

「感傷かんしょうに浸ひたつてるところ悪いんだけど、僕のこと忘れてない？」

涙が出そうになる衝動を必死に堪こらえ、じつと宝物だった物を見つめていた私に、壊れてしまった原因だろうその人が話しかけてきた。

出来ることなら忘れていたかったよ。

本気で……。

「……とりあえず質問してもいいですか」

「何？」

この理解不可能な現実を受け入れる為には、まずは何でこんなことになったのかを突き止める事が大切だね。

「貴方は——」

「祐希ゆうき」

「え？」

「“貴方”じゃなくて“祐希”。
僕のことはそう呼んでくれる？」

「は、はあ……」

突然、青年は私に名前を呼ぶよう要求してきた。

あ。ちなみに私が“久藤君”では無く、“青年”と言っているのは、まだ信じてないからだったりする。

この目の前にいる青年が、私の知っているゲームのキャラクターなんて、……信じたくないし。

でも何でだろ。

名前を呼んで欲しいとか？

まっ、別に大したことじゃないし、名前ぐらいどうって事ないけど。

「ゆうーうつ？」

「はい？」

「ゆう、ゆ、ゆうー……っていきなり言えるかあっー！」

良く良く考えてみたら私、男子とまともに喋るのなんて初めてじゃんっ！

今まで綾さんあやと言う名の美女が対応してくれてたからね！

なのに、……なのにいきなり名前を呼ぶとか、抵抗感ありまくりな

んですけどーっ!?

「と言う訳でとりあえず苗字で勘弁して下さい」

「……どういふ訳なのかさっぱりわからないけど、その調子だとそうした方がいいみたいだね」

「えー……気を取り直してもう一度」

「どうぞ」

「……く、久藤君は、本当に本当の“久藤君”なの？
つ、つまりゲームのキャラクターのー……」

何か、本人にゲームのキャラクターなんですか？

だなんて、物凄く言いづらい質問だね。

これ。

ようするに貴方は存在しない人物ですか？

って聞いているようなもんだし……。

「うん、そうだよ」

ってあっさり認めちゃったよこの人！

いや確かにそうんだけどね？

名前とか、性格とか、言葉使いとか、キャラクターそのものだもん。

でもちよつとぐらひは否定してもいいのに——……

「否定して欲しかった？」

「えっ……」

「僕はゲームのキャラクターじゃない」「僕は違う世界から来た住人なんだ」とか」

軽い口調で話す久藤君。

「残念ながら僕がどうしてここに居るのか、僕自身が知ってるからそんな変なことはいわないよ？」

「あ、そうなんですか……」

「そっ」

どうやら認めざる得ないようだな。

この人が、私の知っている“久藤君”だと言うことを。

しかもかなり冷静だし……しいー？

「……？」

“僕がどうしてここに居るのか、僕自身が知ってる”？

どういう事？

今のって……つまりそういう事だよねえ？

「久藤君は、何か目的があつてここに來たの？」

信じられない事が起きてるせいで、頭が上手く回ってくれないけど。

今の言葉から察するに、ただ単に現れただけって事じゃなさそうだよね……。

「そういう事」

「……！」

や、やっぱり……。

「じゃあ一体、久藤君はここに何をしに来たの……？」

……ゴクン。

緊張してしまっているせい、なまっは生唾を飲み込んだ私。

心臓が、おかしいぐらいに高鳴って、ドクン、ドクンと激しく音を起している。

「それは——」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6323c/>

愛しい君にもう一度

2011年1月14日15時05分発行